

1. はじめに

本発表では『語研論集』特集データを用いて次の3つの問題を分析する：①Comrie (1976) によるアスペクトの（下位）分類の検討、②恒常的真理を示す形式は無標¹であるという説の検討、③動詞連続のタイプと接続詞の相関の解明、である。さらにその後、①②のアスペクトの問題と③の動詞連続の問題を、風間 (2019) における仮説 (2.1.2.で後述) により統合的に説明することを試みる。

2. アスペクトに関する先行研究の通言語的な仮説の検討

2.1. 先行研究とその問題点

2.1.1. Comrie (1976) によるアスペクトの（下位）分類

Comrie (1976) の日本語訳であるコムリー (1988: 43-44) は下記のような図を示している。



コムリー (1988) は上記の分類について、下記のような言語の例を挙げて不完結相内部の形式的な違いを示している²。なお [] は発表者の名づけによる。

[全別型]：習慣相 ≠ 非進行相 ≠ 進行相 (英語、スペイン語)

[習慣相特立型]：習慣相 ≠ 非進行相 = 進行相 (北ウェールズ語、リトアニア語)

[全同型]：習慣相 = 非進行相 = 進行相 (フランス語、ブルガリア語、ギリシャ語、ジョージア語)

Comrie (1976) がどのような一般化をどこまで意図したものであるのかは明記されていないが、この一般化が通言語的に有効であるとなれば、[進行相特立型] や [非進行相特立型] の言語は存在しないことになるが、この点について検証してみる必要がある。野田 (2015: 6) は次のように述べている。

Comrie (1976: 25) には基本的な分類が示されており、不完結相の下位分類として習慣相と継続相 (continuous) を並置し、継続相を nonprogressive と progressive に分類しているが、多様性を極める諸言語のアスペクト形式の分類やその土台となる理論の整備は今なお残された課題と言ってよい。

2.1.2. 恒常的真理は通言語的に無標であるという仮説

「水は 100 度で沸騰する」のように、恒常的な事態を表す文は原則無標である (cf. 「地球は太陽の周りを回る／回っている」)。

野田 (2015: 5)

風間 (2019: 164-169) では SVO の「総称・恒常デフォルト型」言語と SOV の「個体・現実デフォルト

¹ ここでいう無標とは、孤立型の言語の場合は形態的に何もついていない動詞であり、屈折型や膠着型言語で、何らかの語尾の選択が義務的な場合は、辞書形など形態的にデフォルトな形式を指すものとする。

² ただしコムリー (1988) のあげた例はもっぱら過去時制に偏っていて、英語における習慣相の分離についても「過去テンスのばあいにはだけだが」とことわっている点に注意が必要である。

型」言語、という類型論的な対立を提案した。すなわち、SVO 型言語における S は主題兼主語であり、文全体は定名詞についての判断文／述語焦点であるケースが大部分を占める。SVO 語順における多くの文は、デフォルトでは恒常的な時間の中に起きる総称文として解釈されやすい。一方、SOV 型言語では通常の語順の文にそのような縛りはなく、通常の語順の文で現象文／文焦点を示すことができ、むしろ個別の事態についての事象叙述文として成立する。このように考えると、SOV 型言語では恒常的真理の動詞の形態は必ずしも無標になるとは限らない³と思われる。

2.2. 研究方法

2.2.1. Comrie (1976) によるアスペクトの（下位）分類についての検証

『語研論集』15号及び補遺には、43言語の「アスペクト」に関するデータがあり、次のような表現の調査例文がある：(11) [現在進行]「あの人は今（ちょうど）そのリンゴを食べています／食べているところです」・(13) [(現在の) 習慣]「私は毎朝新聞を読む／読んでいます」・(22) [恒常的真理]「地球は太陽の周りを回っている」。このデータによって43の各言語が[全別型]／[習慣相特立型]／[全同型]／[進行相特立型]／[非進行相特立型]のどれになるかを調査する。動詞の形式の異同を判断する際には、屈折形式と共に、(補)助動詞等による迂言的表現も別形式として判断した。副詞のみの違いである場合には、動詞自体は同じ形式とした。複数の表現があった場合には最初のもののみを対象とした。

2.2.2. 恒常的真理は通言語的に無標であるという仮説についての検証

『語研論集』データより、上記の(22)「地球は太陽の周りを回っている。」(15号、以下[地球]とする)の調査例文に、(11b)「海水は塩分を含んでいる」(19号、[海水]とする)・(17)「1に1を足せば2になる」(20号、[1+1]とする)を加えた3つの例文における動詞形態の無標／有標を調査した。

2.3. 調査結果と分析

2.3.1. Comrie (1976) の不完結相の下位分類についての検証

対象言語は次のようなタイプに分類された。

表 1: 不完結相のタイプ別分類結果（なお[全別型]の言語はなかった）

[全同型] (22 言語)	ドイツ語、フランス語、ロシア語、ウクライナ語、ポーランド語、チェコ語、ブルガリア語、ラトヴィア語、ペルシア語、アラビア語、フィンランド語、トルコ語、ハカス語、チュヴァシュ語、ナーナイ語、ジョージア語、トラパネク語、グイ語、ベンバ語、日本語（大阪方言）、エスペラント語、クメール語
[進行相特立型] (15 言語)	英語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、サハ語、モンゴル語、朝鮮語、ヒンディー語、ベンガル語、中国語、ビルマ語、ラオス語、マレーシア語、タイ語、ヴェトナム語
[習慣相特立型] (4 言語)	トゥバ語、ソロン語、ダグール語、タガログ語
[非進行相特立型] (2 言語)	ウズベク語、チナンテク語オスマシン方言

³ 風間 (2019) では、実際に基本語順と恒常的真理の動詞の形態の間に相関があるのかについて、『語研論集』15号のデータによる簡単な検証を行った。本発表ではこの問題についてより多くの言語のデータを用いて再検討を行った。

まず[進行相特立型]や[非進行相特立型]の言語が存在していることがわかる。次に、[全同型]の言語の中心的なメンバーが完結相と不完結相の対立が顕著な東ヨーロッパのスラブ語派の言語(下線を付した言語)であるのに対し、[進行相特立型]の言語は西ヨーロッパの印欧語と東アジア・インドのアルタイ型言語(3.1節で後述)、東南アジア大陸部の孤立型言語にまたがっている(太字の言語、ただし逆は真ではない)。西ヨーロッパの印欧語の孤立型化⁴を考慮すると、[進行相特立型]の言語は類型的にみて孤立型およびアルタイ型の言語に広く存在している。したがって Comrie (1976) によるアスペクト分類案は、東ヨーロッパの言語の実情に即してはいるが、通言語的な一般化としては問題がある。

2.3.2. 恒常的真理の動詞形態についての検証

[地球][海水][1+1]のいずれの例文でも無標の動詞形態を用いていたのは、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ドイツ語、ポーランド語、チェコ語、ブルガリア語、ベンガル語、ヒンディー語、ビルマ語、中国語、タイ語、ラオス語、クメール語、ヴェトナム語、マレーシア語であり、ヨーロッパの印欧語、もしくは東南アジア大陸部の SVO 語順の孤立型言語に偏っている。このタイプの言語は3つの例文が調査できた38言語のうち18言語(47.4%)を占めている。語順がかなり自由な言語(下線の言語)も SOV 語順の言語(二重下線の言語)もどちらも含まれている。このように、たしかに恒常的真理が無標である言語はかなり多く存在するが、そうでない言語も多い。有標の進行形や派生形容詞を用いる言語⁵が多く存在する。モンゴル語では[地球]と[海水]に恒常形動詞形(V-dAg⁶)、[1+1]に非過去形(V-nA)が用いられていた。「恒常」に特化した動詞形態を持つ言語があることが注目される。したがって恒常的真理が通言語的に無標の動詞形態によって示されるとはいえない。

3. アスペクトと副動詞形

3.1. 先行研究とその問題点

亀井他(編)(1996: 1105-1107)は次の3つの動詞連続⁷のタイプを提案している。

表 2: 動詞連続の3つのタイプ

動詞連続のタイプ	実現形態	よく見られる言語のタイプ ⁸
団子型動詞連続 (Co-ranking structure)	主語 言い切り形 接続詞 主語 言い切り形 …	屈折型言語
鎖型動詞連続 (verb chaining)	(主語) 非言い切り形 … 言い切り形	アルタイ型言語
ビー玉型動詞連続 (verb serialization)	主語 言い切り形 言い切り形 …	孤立型言語

⁴ 「西ヨーロッパ言語連合」の特徴として指摘されている。亀井他(編)(1996: 502-503)を参照されたい。

⁵ なお今回3つの例文を対象に調査を行ってみた結果、恒常的真理を示すとした調査例文間にもなおアスペクト的な違いがあり、それぞれの調査例文に特徴的な形式が観察された: ① [1+1]には「1と1は2」のように名詞述語文で示す言語(アラビア語、トルコ語、ウズベク語、トラパネク語、グイ語)や動詞の未来形で示す言語(ロシア語、ジョージア語、ナーナイ語)がみられた。タガログ語では「1に1を足せば2になる」のような条件表現であったため、*ma-gi-V* (ACTOR VOICE.IRREALIS-CONTINUATIVE-V)の動詞形態が用いられていた。② [海水]には存在を示す形容詞で示す言語(ウイグル語、タタール語、キルギス語、トゥバ語、タガログ語)や N-PROPRIETIVE (これも派生形容詞である)で示す言語(サハ語、ソロン語、グイ語)、名詞述語文で示す言語(チナンテク語オスマシン方言)がみられた。③ [地球]には進行形を用いる言語(日本語(大阪方言)、ペルシア語、トラパネク語(INCOMPLETIVE))がみられた。朝鮮語は[海水]に進行形を、ペルシア語は[1+1]にも進行形を用いている。

⁶ 形態素表記における大文字は母音調和による異形態のあることを示す。

⁷ ここでいう「動詞連続」とは verb serialization (本発表での「ビー玉型動詞連続」)を指しているのではなく、広く動詞句/動詞節の連結一般を指していることに注意されたい。

⁸ [よく見られる言語のタイプ](下線部)は亀井他(編)(1996: 1105-1107)の内容を踏まえた上で発表者が加えたものである。

亀井他（編）（1996: 28-29, 896, 994-1001, 493-500）では、「アルタイ型言語」とは膠着的で head-final な単肢言語であり、屈折型の言語は両肢言語であるとする「統語論的類型論」が提案されている。その要点を動詞連続の観点から表に整理すると下記のようになる（下線部は発表者が加えたものである）。

表 3: 亀井他（編）による統語論的類型論と動詞連続に関する類型論の統合

動詞連続のタイプ	典型的タイプ	典型的統語原理	VV (や AN) 間の関係	典型的語順
団子型動詞連続	両肢言語/主語必須	照応	同格	自由/ <u>SVO</u>
鎖型動詞連続	単肢言語/pro-drop	連辞・head-final	修飾	SOV
ビー玉型動詞連続	孤立型言語	語の意味関係・文脈依存	時間的前後関係・同格	<u>SVO</u>

以下では鎖型動詞連続に見られる「非言い切り形」を「副動詞形⁹」と呼ぶことにする。SOV 語順の言語には頻繁にかつ多くの種類の副動詞形が用いられている。一方、団子型動詞連続では、前後の動詞の主語や時制に関しては無関心な接続詞が用いられている。しかし動詞連続に関する上記の通言語的な傾向や分類は、まだ十分に世界の諸言語で検証されたわけではない（Haspelmath (1995: 3) も参照）。

3.2. 研究方法

ここでは①副動詞形／接続詞の使用の有無、②接続詞を使う場合、その接続詞は名詞の並列にも用いられるか否か、という 2 点について通言語的な調査を行った。『語研論集』20 号は連用修飾複文についての特集で、このうちの調査例文(2)「(私は) 昨日は 10 時に家に帰って、少しテレビを見て (から)、寝ました」から継起的な動作の連続（物語的連鎖 / narrative chain）のデータを得ることができる。一方『語研論集』21 号の(6)から「赤い袋と青い袋」という名詞の並列のデータを得ることができる。

3.3. 調査結果と分析

対象言語は次のようなタイプに分類された。副動詞形と接続詞の使用は相補的である。

表 4: 動詞連続の諸形態の観点からみた諸言語の分類

		接続詞非使用	接続詞使用
副動詞形使用		Type A: サハ語、トゥバ語、トルコ語、ウイグル語、モンゴル語、ダグール語、ソロン語、朝鮮語、日本語、 <u>ベンガル語</u> 、 <u>ビルマ語</u>	Type B: ヒンディー語、トルコ語、ナーナイ語
副動詞形非使用 (定動詞)	名詞間と同じ接続詞を使用	トラパネク語	Type C: 英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、チェコ語、ブルガリア語、ペルシア語、 <u>アラビア語</u> 、 <u>ジョージア語</u> 、 <u>フィンランド語</u> 、 <u>マレーシア語</u>
	名詞間とは別		Type D: タイ語、ラオス語、ベトナム語、クメール語、漢語、 <u>ポーランド語</u> 、 <u>チナンテク語</u> <small>オスマン方言</small>

⁹ 「副動詞」でなく「副動詞形」と呼ぶのはそれが動詞屈折の一形態であるためである（Haspelmath (1995: 4)）。本発表の「副動詞形」は広く「従属的な動詞形」（dependent verb forms, Haspelmath (1995: 26)）を指すものとし、日本語の連用的諸形式（-テ、-ト、-バ、-タラ）やバプア諸語の中間動詞（medial verb）、インド諸言語の接続分詞（conjunctive participle）も含むものとする。

Type A、すなわち副動詞形使用・接続詞非使用であるのは、全て SOV を基本語順とする言語で、下線を付したベンガル語とビルマ語以外は北東アジアのアルタイ諸言語と朝鮮語、日本語である。名詞の並列には共格などを用いるが、これは動詞連続には用いられていない。名詞の並列に動詞の副動詞形を使う言語もある（モンゴル語の *bol-ood*、ダグール語の *bol-oor*、ソロン語の *oo-čči*、朝鮮語の *ha-go*、いずれも「なる」もしくは「する」の継起副動詞形）。

Type B、すなわち副動詞形使用・接続詞非使用の 3 言語においては折衷的であり、おそらく歴史的には過渡的な状況が観察される。例えばヒンディー語の例を見ると、一文中に定動詞+接続詞 (*aur*) の連続と、継起の接続分詞の両方が用いられている。

・ヒンディー語 ((1)は小林 (2021: 314)、(2)は早田 (2021: 328)による、グロス是一部改変、なお本発表で使用したグロスにおける略号は全て Leipzig Glossing Rules にある)

(1) *kal mā das baj-e ghar wāpas ā-Ø-yā*
 yesterday I.NOM 10 o'clock-OBL home.M return come-PRF-M.SG
aur thor-ī der tak tīwī dekh-kar so ga-yā
and a.little-F time.F.SG until TV.M.SG watch-PFV.CVB fall.asleep go(AUX).PRF-M.SG
 「私は昨日は 10 時に家に帰って、少しテレビを見てから、寝てしまった」

(2) *lāl aur nīl-e thail-e mē se*
 red and blue-M.SG.OBL bag-M.SG.OBL into from
 「赤い袋と青い袋のうちから」

これに対し、Type C、すなわち副動詞形でなく定動詞を使用しそれらを接続詞でつなぐ言語では、名詞の並列に用いる接続詞をここでも用いることが多い (18 言語中の 11 言語、そのうち下線を付した言語以外は全て印欧語族の言語である)。

・ロシア語 ((3),(4),(5)は宮内・佐山 (2015: 143-144, 146-147)、(6)は中岩・プロホリア (2021: 160) による、グロス是一部改変)

(3) *Obyčno on čita-et gazet-u i obeda-et.*
 usually he.NOM read.IPFV-PRS.3SG newspaper.F-SG.ACC and have.dinner.IPFV-PRS.3SG
 「彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる」

(4) *Včera ja vernu-l-sja domoj v 10 čas-ov,*
 yesterday I.NOM return.PFV-PST.M-REFL home in 10 hour-PL.GEN
nemnogo posmotre-l televizor i ljog spat'.
 a.little watch.PFV-PST.M TV and lie.PFV.PST.M sleep.IPFV-INF
 「私は昨日は 10 時に家に帰って、少しテレビを見てから、寝ました」

(5) *Ja otkry-l okno, i iz nego podu-l*
 I.NOM open.PFV-PST.M window.N.SG.ACC and from it.N.SG.GEN blow.PFV-PST.M
xolodn-yj veter. (6) krasn-yj paket i sin-ij paket
 cold-M.SG.NOM wind.M.NOM red-M.SG.NOM bag.M and blue-M.SG.NOM bag.M
 「窓を開けると、冷たい風が入って来た」「赤い袋と青い袋」

日本語では「V-ながら V」、「V-て V-て V」、「V-と V」とさまざまな副動詞形によってアスペクト的關係などを表現しているのに対し、ロシア語ではそれぞれ“V.不完 and V.不完”、“V.完,V.完 and V.完”、“V.完 and V.完”と定動詞を同じ接続詞 (i) によってつないで表現している。ロシア語の定動詞は TAM・人称という屈折カテゴリーを十分に標示しているので同じ接続詞を用いることが可能である。これに対し日本語では文末の動詞のみがテンスや視点(人称に準ずる機能を示す)を示し、文中の副動詞形は後続する動詞に対する相対的な関係を示すにとどまるため、その関係の種類に応じて異なった副動詞形が必要とされる。例えば(5)の日本語で「V-と」を「V-て」に代えると「窓を開けて冷たい風が入って来た」となり、「冷たい風」が「窓を開けた」ように感じられる(つまり同主語)。主語や意志性なども副動詞形の方でコントロールされている。不完結相/完結相のアスペクトの対立は一般に「線的/点的」、「動作を内側/外側から捉える」と説明されるが、こうした動詞連続における機能についてもっと注意を払うべきではないかと考える。

Type D の言語(すなわち[副動詞形・接続詞をともに使用するが、その接続詞は名詞の並列に用いるものとは異なる言語])は、下線を付した2言語を以外全て東南アジア大陸部の孤立型言語である。このタイプの言語は基本的に上記の「ビー玉型」であり、時系列に沿ってさえいけば基本的に接続詞は任意であるようだ。調査例文にみられた接続詞はもっぱら2つ目と3つ目の動詞の間のみ現れている。

4. 今後の課題

風間(2019: 164-169)では「SVO語順の言語は「総称・恒常デフォルト型」言語となる」という仮説を提案した。この仮説によればヨーロッパの印欧諸語で恒常的真理がデフォルトの動詞形態をとることや、名詞接続と同じ接続詞を動詞連続にも用いることをうまく説明できる。他方、やはりSVO語順である東南アジア大陸部の孤立型言語では同じ接続詞が用いられないことや、スラブ諸語の多くが自由な語順を示すことについてはうまく説明ができない。今後はさらに西アフリカの孤立型諸言語の振る舞いをよく観察する必要があり、動詞連続に関してはパプア諸語の中間動詞を精査する必要がある。まだデータがない/少ない新大陸やオーストラリア先住民の言語のデータの追加と分析も大きな課題である。

参考文献

- Comrie, B. (1976) *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press. / Haspelmath, M. (1995) The converb as a cross-linguistically valid category. In: Haspelmath, M. & E. König (eds.) (1995). / Haspelmath, M. & E. König (eds.) (1995) *Converbs in crosslinguistic perspective: structure and meaning of adverbial verb forms-adverbial participles, gerunds*. (Empirical Approaches to Language Typology, 13.) Berlin: Mouton de Gruyter. / 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』(「ビー玉型動詞連続」の項) 1105-1107. 東京:三省堂 / 風間伸次郎(2019)「第6章 語順と情報構造の類型論」竹内史郎・下地理則(編)『日本語の格標示と分裂自動詞性』141-175. [風間(2022)に所収] 東京:くろしお出版 / 風間伸次郎(2022)『日本語の類型』東京:三省堂 / 小林颯(2021)「ヒンディー語の連用修飾の複文」『語学研究所論集』26: 313-323. / コムリー, バーナード(1988)『アスペクト』, 山田小枝訳, 東京:むぎ書房. / 宮内拓也・佐山豪太(2015)「ロシア語の連用修飾複文」『語学研究所論集』20: 143-151. / 中岩諒・マリア プロホリア(2021)「ロシア語の情報構造と名詞述語文」『語学研究所論集』26: 159-164. / 野田高広(2015)「アスペクト」斎藤純男・田口善久・西村義樹(編)『明解言語学辞典』4-5. 東京:三省堂 / 早田仁知(2021)「ヒンディー語の情報構造と名詞述語文」『語学研究所論集』26: 325-333.